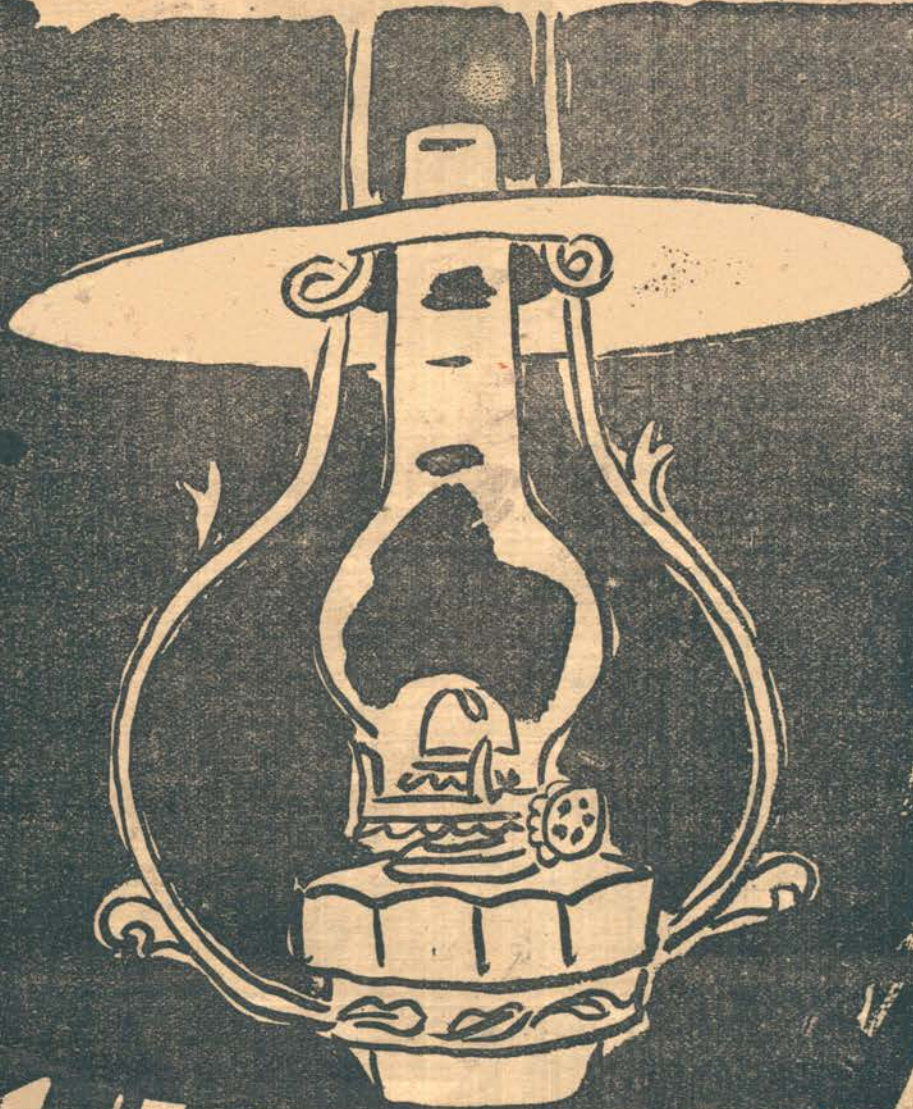


麻生路郎★主幸

川柳雅集



一・二
月號



PERSONAL GAS LAMP LIT - 1

新 春 放 談

主・素派らしい景氣だね
客・五、五、〇ですよ。
主・そいちゃアよかつた
ネ。こちらはいつも
五・七・五だ。
客・でも、シンシンで
すぜ。
主・まさに、その通りだ
が、人並みなことを
やつてちやア雑誌が
ストップするよ。
客・それもそうですネ。お氣の毒
ですな。
主・しかし、煙りだけはあげて
るよ。
客・民のかまごですか。

主・違うく。
客・僕はアタマが悪いですな。
主・東京では句會の遊戯化をなげ
いて、新進が結束して起つた
そうですが……。
主・知つてるよ？
客・どうお考えです？
主・まだゴツちとも云えんな。
客・既に起ち上つてゐるんですよ。
主・起ち上つても、起ち上つても、
なほ彼等、自由にならざりジ
ツと足を見る——かね。
客・マジメなんですよ。
主・オレもマジメだ。
客・老人連の壓力を甘く見すぎて

主・……。
主・そうだ。たしかに、そうだ。
客・では、どうしたらいいので
す？
主・お互ひの脱皮運動が先の問題
だ。新進の魅力は情熱だが、
情熱の一本鎗でもいいかんで
なア。
客・三太郎一派の俳句調はどう
です？
主・今の若い人間はアレでない
と、食ひ付かんと云うのが三
太郎の主眼だよ。
客・まるで魚釣ですな。
主・食いつくとか、食いつかんと

か云うのはおかしいぢやアな
いか。食いつかすだけの努力
をしたか、どうか。努力をし
ても、哲理性に欠けりなかつ
たか、どうか。ゴ本人が自信
を失つてゐるか、論ずる
までもないな。
客・一九四八年の柳界の動向は？
主・オレは若い人達に期待をかけ
てゐる。ボツ／＼いゝ作家も
出て來たよ。句會も盛んにな
るだらうし、柳誌の興廢もハ
ツキりするだらう。
(略)

川柳の諷刺とウガチに
ついての随想

石 原 青 龍

ばくが「川柳の存在理由」
——ツマリ俳句と區別される
最も重要な點を「ウガチ」に
置いて論じているのに對し、
「ウガチだけが川柳でない」
との抗議が方々から出てい
る。この抗議の根底には、川
柳の持つ「おもしろみ」のい
ろいろ——例えば人情味、情
調、ウガチの無い詩的なユウ
モア、あるいはゆるな三要
素など——ウガチを同等に置

いて考えている、ということ
が察せられる。然し、ウガチ
以外のそれらの持ち味は、理
論的に言う、他の文學のジ
ヤナルに共通するもので、川
柳だけのものとは言えないと
ばくけしう。

またばくは最近再建日本の
文化面における川柳の存在理
由を強調する方途として「諷
刺文學としての川柳の再出
發」を提唱しているが、單な

る諷刺ならば他のジャンルと
共通するので、理論的に「川柳
の存在理由」を明にしない。
すなわち、川柳の諷刺にはウ
ガチが無ければならぬと言
うのである。ウガチは川柳の迫
力たる「寸鐵殺人」性の根本
であり、それがあるがために、あ
の散文的、非詩的な想念を、最
短詩型で以て活かし得るので
ある。最近ばくの關係してい
る新俳句人連盟や、幻像(俳

句半綜合誌)の人々の進歩的
といわれる句には、生活感情を
ムキ出しにうたうことが多い
ので、現在の社會情勢からし
て、自然に諷刺の句がよく出
る。これに對して、川柳の存
在理由に認識の無い人々は
「川柳とどうちがうのだ」と
疑問を抱いている。もちろん
ん、これらの作者は傳統俳句
の季や文語体は問題にしま
ない、いわゆる「無季容認派」
である。ばくはこれに對して
ウガチがあるか無いかで區別
されると主張するのだが、こ
の意味はばくの説明がマズイ
のかあまりまだ徹底しない。

「川柳研究」の進歩的作家た
ちは、無季俳句と區別の無い
句を作るので、ばくとの間に
目下論争中だが(當面の相手は
北村雨垂氏)これは重大問題
で、川柳の今後のありかたを
決定するためにも、ぜひ冷静
に、徹底的に論争しておきた
いと考へてゐる。この問題に
ついて「俳句だの川柳だのと
いう名稱はどうでもいい、で
はないか、短詩としてリツパ
なものを作ればそれでいい」と
という議論は、ばくは敗北主
義だと思ふ。

然し、ばくも大に反省して
みなければならぬのは、ウ
ガチがはたして今後の新しき
世代にミリオクを持ち得るか
どうかという問題である。と
いうのは、俳句短歌に對し
て、傳統否定の論が盛になつ
て來たのと、同じ理由から、
川柳の傳統たるウガチをも否
定すべきだという議論が出る

熱に解る 感

Omni

黒田製薬株式会社

かも知れないと考えるからだ。この議論の發展方向はすでに「短詩型文學の否定」にまで進みつつある。不幸（不遇）にして川柳は現代の文學評論家の眼中に無い（その眼中に入らせようと、ばくは歸國以來いろいろの工作をしているが、なかなかむつかしい）から、特に川柳について何人もふれないが、彼等の氣持は「もちろん川柳もふくめて」というにあることは充分に察せられる。たゞ、ばくの希望的觀測では、諷刺文學は今後といえども——いな今後さらに——

盛になると思われるので、諷刺の一形態としての短句の威力——寸鐵殺人性——ということが、傳統否定の例外として認められる可能性がありはしないかと考えている。この威力を認めさせるためには、ばく一人だけでなく、多數の有力同志の努力——これは理論と實作と共に精力的に文化界に呼びかけねばならぬ——が無ければならぬ。路郎先生あたりも、何とかそうした方向に一段と歩を進めてもらいたいと念ずるのだが、先生は「詩」論者らしいので、ばくと歩調は合わないのではないと思ふ。

君見たまへほうれん草がのびている

の詩川柳（？）から

軒先に下駄にもならぬ桐がのび

のウガチ（同時に諷刺）に變らねばならなかつた傾向の示すところは、ある程度ばくと同調できるものがありはしないかと考えても見る。これについてあるいは、時代相がそう

事物教育（はがき日記）

高島米峰

道路を痰壺と心得て、無闇に吐き散らす痰唾のために、滑べつて轉んだ子供がある。横町を便所と間違えて、汲み取り桶を潰さ込んだおわい屋さんがあつたほど、垂れ流し御勝手となつて居る。野蠻なれ。不潔なれ。無理もない。文化國家建設の途上にある國會議場の真中で、我等國民の代表者が、小便を垂れて、實物教育をして呉れて居るんだもの。

—東京都・社會批評家—

させたのだという見かたもあるう。「ほうれん草に詩を感じるようなノンキな時世かい」とやられるかも知れない。ところで、そこがばくの言う諷刺文學としての、今後の川柳のありかたなのだ。今後の日本には諷刺を必要とする對象が、多々益々増加するとばくは見ると。

ひとあるいは、「その時代

だけに通用する川柳はツマらない、萬代不易の句でなければならぬ」と言うだらう。だが、ばくは川柳の文化的使命は、その時代に對する批判に重點がおかれると考える。そこにも「非詩」の理由があるのだ。古川柳にしても、今日は時代のへだたりから、難解の句が多いが、諷刺の句（だけでもないが）は、その古典研究によつて、當時の「歴史」を知ることができ、他の文獻に無い當時の人民の感情がわかつて、リツパに文化的使命をはたしているのである。もちろん當時は當時として、その時代の人民の「心の糧」としての使命をはたしたのだ。この觀點からすれば、われわれが、現代の社會の種々相を川柳することは充分に意義があり、決してツマらないことではない。

また功利論でもないが、不易の句といふものは、そうザラに出来るものではないし、大体において古川柳でよみつされた問題が多い。ばくも時には

蜂の巢は雨のたまらぬしかけにて

東洋の狐は醜女には化けずなどいふた不易性のものをねらつてもみるが、大部分の

ばくの心の感動は、現代の世

相に關するものによつて占められる。「川柳雜誌」の句を見ても、敗戦以後のは、特にそれが多い——路郎先生の句もその例外でないことは前掲の外にも大部分がそうであるので明らかだ。「人間探求」といつたところで、不易的なものはそんなに新發見があるものではない。その時代相によつてバクロされる人間性を探求するほかはないではないか。もちろん、その表現法において、なるべく不易性を求めることは迫力の上からも必要である。

近頃實に愉快なことは、全國の川柳家が、ばくの非詩論に反對しながら、實作の上に、おいては、やむにやまれぬ對社會感情のほどばしりから、非詩的なウガチや諷刺の川柳を盛に發表しているという一

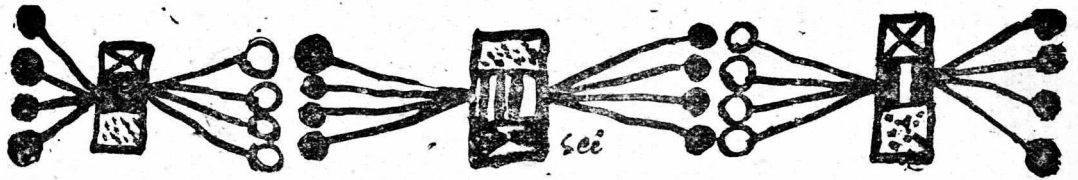
事だ。東京と大阪の有名柳誌

をひらいて見れば、その實例は非常に多い。ばくの非詩論の長いライバルである東野大八君にしても、「川柳雜誌」一四九號の近作柳樹に出した句など、八句全部がばくのいう非詩のものだ。實をいうと彼の句は詩的の方がおもしろい——少なくとも個性的だ——のだが、そして彼もそれが念願らしいのだが、あの八句のようなものをどうして作らなければならなかつたか、というところに、上にのべたような興味深い問題がある。

踏切へ汚い貨車がまだ續きこの句は詩感も多少あるが、「汚ない」と「まだ」のひつかゝりはウガチである。着想は問題無くふい。これに時代感情をモツと入れ、ばく救われるかも知れぬ。再考を望んでおく。

近畿日本鐵道

伊賀・伊勢方面へは のりば 上 六
河内・大和方面へは のりば アベノ橋



大阪市 浪 玲 之 介

世を嘆く人とは見えす釣の友
二千億然し財布の落ちてなし
置手紙チト言ひ過ぎたなどおもひ
同僚が知事とは淡き誇りなり
口下手の手紙一分の隙もなし
罹災者として天皇のおわしまし
生活に差あり同僚とも呼べす

兵庫縣 戸 倉 普 天

自作にはなつたが六十たよりなし
ライターに燐寸も持つて出にやならす
買へば高し賣るものはなし燈は暗し
四五台は待つても乗る氣妻は老け

玉造温泉に一浴して

伊丹市 岩 崎 柳 路

無條件で就職頼む五十過ぎ
鼻糞をほじくつて居る間に降りる驛
五百圓のライターだよ君と見せに來る

奈良縣 上 田 翠 光

雨の音を聞いている戀は靜なり
寢轉んでみたり小豆の肌ざはり
長つゞきしそうにもない鉄をふる
上臈は口説きなれたる中で縋り

鳥取市 大 西 八 歩

聖上を仰へ奉りて
御西下の出雲の國の菊香る
吾れ凡夫風の心になり切れず
豊作の柿の土産をさげすまれ
はぜ紅葉芒は風に南無散華

直江津にて(二句)

降り立てば良寛さまの國の風
佐渡おけき風に流れて來そうなり
古典趣味文が身につく年となり
なやむ日は居眠る人のうらやまし

尼崎市 水 谷 鮎 美

夜の車窓にこゝろが寫るなり
瓶に挿すことあきらめのひとつなる
手作りの下駄を老母から渡される
焼跡の蘆屋夫人に山近し

酒の灯へ竹の葉の露それもし

大阪市 福 田 妄 夢

手錠といふ悲しきものゝある事實

大阪市 須 崎 豆 秋

桐落葉ハラ／＼百圓札に見え

これはこれはどうどんばりもロソクか

電柱の數ほど巡查立つならん

大阪市 竹 内 潮 花

ぼろそうに見えるは巡查ばかりなり

がい骨の様な工場に冬迫る

働いて來て仕合な手をあぶり

滋賀縣 北 川 春 巢

ふと責を母の白髪に感ずる日

ライターの友に別れてから點かす
通勤車西田哲學立つて讀み

恩返しに行けばおためを又もらひ
久しぶりの母が縮んだように見え
鉛筆をなめてメートル見て歸り
繁昌をはめれば税を聞かされる

奈良縣 尾 崎 方 正

未亡人雲の彼方も凝つと見る
二人歩けば路傍の花も綺麗なり
繪を画いて三十歳を嫁き遅れ
値上げ／＼醫にたづさはる怖しさ
臭ひます／＼貴方の臭いです

大阪市 菊 澤 小 松 園

停電の街へ月光降るごとく
來るところ迄來てしまつてる子が五人
子を連れて出ても好い娘へ眼は流れ
でぼちんをかくすパーマをかけに行く
酔つて握るハンドル地獄へまつしぐら
釣鐘は歸らず撞木宙ぶらり
税金の寢言となりし小商人

岡山縣 逸 見 灯 竿

おい酒だ酒だと言えぬ世となりぬ
菊の花酒がないので妻うれし
廻診え附添さつと改まり

七輪え風の子までが手をかざし
演説がすぎて今日から敵となり
靜脈をあらわに古稀の祝する

大阪市 清 水 白 柳 子

煙草値上げ

又しても空のケースをあけるなり
手巻手巻どうせすわれぬピースなら

大牟田市 高 田 抱 逸

御披露だスッパイ酒も我慢する
御通夜して場所もあるうに釣のこと



大阪市 木下 幽王

接吻の話へは、このこわい顔
 溺死んで心齋橋へおどりでる
 なまこによる、闇の買手を持つてゐる

借衣裳どこかに酒のかざもする
 生産過剰は赤ん坊ばかりなり

むかし、大阪の夢さる、昆布
 胎教のせいさと母へたてをつき

減産々々されど貨幣は波のごと
 秋を彩るもの、中に値上ビラ

スタイルブックと異ふは顔と手足と
 鳥取市 中島 鐵洲

新春 譚

装いわけなけねど春のミスボリス
 衣桁賑やかに續く春の夜

母は母なりにお顔がひろいなり
 大阪市 新川 博也

菊一輪小鳥一羽の部屋靜か
 大阪市 橋本美奈子

サラリーは人がさはいであげてくれ
 たまに來てほしいと女に叱られる

唇を眞赤にぬつて自活する
 社會黨それが女將の氣に入らず

お正月あらたむ程のものもなし
 廣島縣 弘津 柳慶

智恵ついでうるさく子供開き返し
 産婆さん丸共の請求書持つて來る

そんな時僕も違反をやり兼ねず
 千圓で一生保證した保險とは

大阪市 稻葉 鳩花

流れ星川の流れにそつて消え
 宇都市 國弘 半休

つな引きの勝は女の少い方
 警乗の前は兩手に分けて携げ

コスモスへ少し冷たい床拂い
 大阪市 小澤 史葉

開業を案じた恩師顔を出し
 政令違反事務の端唄あだになり

同權と別に女のよく儲け
 スト成らずマルクス主義も凍りかけ

微熱ですわ、と女事務
 パン、のようなスタイルよし給へ

東大のなれの果てですせんざい屋
 大阪市 市場 凌食子

赤字だと云ふが帽子も靴も購ひ
 月の出へ明日の闇値を考へる

腹の減る遊び私は見てゐます
 名古屋市 吉田 水車

退け前の銀行手荒く札を授け
 ねずみもう聲帯模寫にをどろかす

取締役社長かつての宮殿下
 西曆に直してみても一と昔

あいびきのサインや銀座尾張町
 しつかりと鞆を抱いて十二月

君少し慌て給えと十二月
 父さんも空ビンさげて十二月

百万圓君當つたらどうする氣
 停電の下でかすかな箸の音
 宮殿下遅配の事もふれ給ひ

○ 大阪府 池澤 樂居

亡妻二周年

のこされた愚夫は今更愚婦懷ひ
 長男 戰死

公報はまだ來ず位牌無きぞよし
 老ぬれば清く住まんとやめなり

金剛山下に移る
 菊水の旗上げしたい政治なり

金澤市 安川 久留美
 片山を恨むな世帯下手だから

政治家はキワどい所で卒倒す
 役不足でも次女公休に芋を焚き

風は硝子と仲のいい風さ
 屑芋を政府脊中へせ負わせる

松山 前田 五健
 靴を磨けば靴をいたはる心湧く

千里同風足らぬ、と寒い事
 大臣も樂でないなど焚火の輪

大阪府 橋本 綠雨
 なんでもあるが泣けてくる戎橋

大蟹子蟹北國の味をほめ
 昔なら家も滅もたつ月給よ

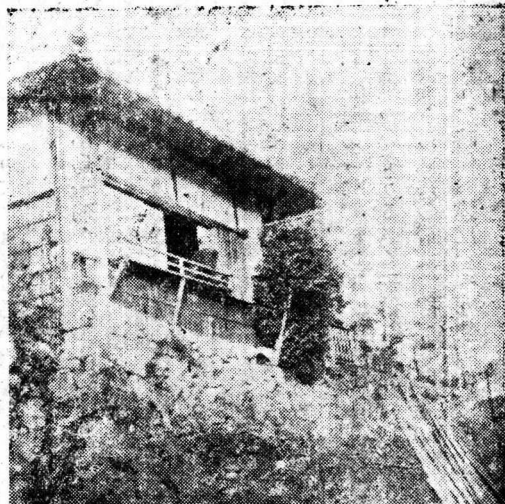
賀 春

川柳雜誌社

主幹 麻生 路郎

大和の山莊

麻生路郎



伊賀の上野市に疎開してゐた葭乃が、上田翠光氏の世話で十一月十六日に、大和の三本松村に移つた。大阪の上六から近畿日本の名張行に乘車すれば名張の二つ手前の驛が三本松である。驛のダラ／＼坂を一丁ほど西へ下ると縣道へ出る。縣道を更に西へ二丁ほど行くと右側に頓光寺といふ寺がある。寺の石段を登つてすぐ左手の一小舎がそれである。大阪の不朽洞に對して不朽洞山房と稱することにした。不朽洞會員が小集を開いたり、吟行の足溜りにされるやうに、親しみのある名を用いることにしたのである。

非常に景色のいゝところ

で、四方は山又山に取り圍まれてゐる。眼下には宇陀川が流れ、川べりから上方には山田が雛段のやうに積みかさなり、一段高いところに、鐵橋がかかつて大阪から往來する電車が、思ひ出したやうにゴ－ゴ－と凄じい音をたてる。鐵橋の西方には學校の屋根が遙に見えてゐる。全くこどもの繪本の美しさだ。

名も知らぬ山の起伏をうれしが

こんな句が出来た。朝夕の山の美しさは到底拙筆では云ひあらはせない。
焦都大阪であわただしい生

謹賀新春

(柳人交歓のページ)

風見草吟社

石川縣大聖寺町宇陀山一八

仲町五	高田	茶撫朗
寺町	佐分利	明石
法華坊	栗山	桃園
關山	代吉	祥
魚	林	山
本	杉浦	醉羊
本	龜谷	溪鶯
本	中村	青豊
本	細呂木	魯木
荒	福	貞人
荒	胡桃	東代女
耳聞山一八	野村	味平
荒	那谷	光郎

六十五歳生けるしるしの保險業

大成火災

庄

健一

万よし老人

事務所 大阪市北區小松原町三

日本商工聯盟内

自宅 大阪市阿倍野區阪南町

(電話豐崎五六〇〇)

西一丁目二六

愛知縣犬山町

すげ笠川柳社

山田有町

月刊「すげ笠」一部十圓

郵五十錢

森口田朗

大阪市北區宗是町大ビル三二二
天満自家用自動車組合内

全大遞阪信病院支部川柳班

池戸	桃村	市場	没食子	井上	露芳	牛田	晴夫	岡野	良子	尾崎	方正	小澤	史葉	木村	晚成	酒井	純三郎	田中	耕人	多田	禿天	津村	神峰	中谷	葉菜子	南條	三郎	西川	惠風	水谷	竹莊	森下	のぶ	幹事	吉田	斜水
----	----	----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	----	----	----	----	----	----	----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

轉居いたしました

奈良縣生駒郡北倭村字高山

清水良祐

謹賀新年

大阪市東淀川區三津屋

北通四ノ二九

武部香林
武部若菜女

稻垣松夢

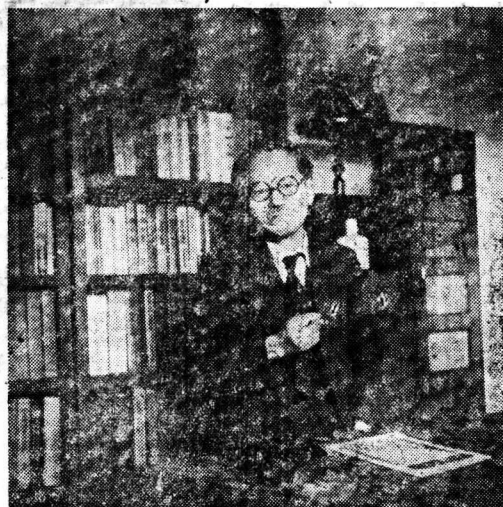
川村好郎

吉田圭井堂

中島生々庵

吉比正作

堺市諏訪森町
西三丁目二七二



不朽の山房に於ける主幹

朽山房に於ける主幹は、山房の四枚の板戸の座敷へ面した方へは色せんかを張り、その上に揮毫作品を貼つて部屋にうるほひをもたせることにした。滑稽なことには、この板戸には外部に錠前がかかつてゐる。知らぬ人が来たらいづつ来ても留守である。盗られるほどのものがないにしても、外部へ錠前をして、内部からの戸締りがしてないのである。そこまでは泥棒も氣づくまい。尤もこの記事を諸君が讀まれるころには、内部からの戸締りも完成してゐる筈である。

三本松は炭の買出しで一時は混雑を呈した驛だが、検問所が出来て取締りが嚴重になつたので、最近では炭の買出しも、あとを絶つて、ひっそりとした驛になつてしまつた。

検問所も至つて閑散だ。ピストルを背負つてブラ／＼する巡査の姿を時折見かけるに過ぎなくなつた。寒さは日に日に加つて來た。雪が降り出した。ヴェランダでは骸がハネかへつた。洗ひあげた茶碗のふちまで水が張つてバリ／＼と音を立てた。しかし、部屋の中では句作三昧に耽ることが出来た、静に書物を繙くことも出来るので、山房での春待つ姿にはうれしい影がさしてゐる。

不朽洞

麻生路郎
麻生葭乃

大阪市住吉區
万代四五ノ二五

大阪市阿倍野區
晴明通一丁目

藤村雅光

京都府相樂郡笠置町
平田十一 藤村方

高鷺亞鈍

徳島縣美馬郡穴吹町

姫田夕鐘

金澤代表の喫茶店

おきなや
店主 西本三蝶

金澤市玉川町通

鳥取支部 川端柳社

鳥取市川端町三丁目一五

同市川端町三丁目

同市川端町三丁目

同市川端町三丁目

同市川端町三丁目

同市川端町三丁目

同市川端町三丁目

同市川端町三丁目

同市川端町三丁目

同市川端町三丁目

同市川端町三丁目

同市川端町三丁目

同市川端町三丁目

同市川端町三丁目

同市川端町三丁目

同市川端町三丁目

同市川端町三丁目

同市川端町三丁目

同市川端町三丁目

同市川端町三丁目

同市川端町三丁目

同市川端町三丁目

謹賀新年

堺市濱寺諏訪森町西三丁二七二

生々庵 中島逢太郎

診療所 大阪市南區三休橋南詰南へ西入

移轉致しました

大阪市東區道修町
五丁目一番地

藥研商事株式會社内

せんりう 昭和吟社

元旦だ人の心はのぞくまい上を見れば限りない下をみても限りのない人生暗い世相をなげいゐる暇があつたら川柳を讀み川柳を作つてもつゞ／＼明るく今年も生きてゆこう

川柳雜誌社大和支部

幹事 上田翠光

奈良縣宇陀郡
三本松村向淵

大鶴喜由

神戸市垂水區水谷
明石通信療養所心の春吟社

香川縣琴平町
菊地香方



ひよろ／＼と参万圓の牛歩む 愛媛縣青 明
芋やにの掌で月曜を執務する 同
癡人となり住職の碁の相手 同
刈入れの後の地肌は冬の肌 同
磨いても光らぬ靴のよはいなり 同
追放の妻があきなふ乳母車 同
白菜が頬冠りしたもう冬靴 同
疎開者を一そ淋しくさす紅葉 同
切れ話あなたを意識ではないと言ふ 下松市白 星
ふと我にかへる女囚の乳が張り 同
官服を着れば笑はぬ父となり 同
描眉毛足を踏まれたまゝでゐるす 同
日曜を訪へば笑はぬ女なり 同
よそゆきはあらまし賣つて生きてきた 同
舞踏靴腕をば組んで磨かせる 同
貞操など虚榮と思ふ日が續き 同
指の節鳴らして闇屋下車支度 滋 賀 笠
子の軍靴履いて巡査の背が丸し 同
生きてゐてくれるだけでよい夫 同
勞はれば後へかくす妻の戦 同
二人とも映畫にやつた置炬燵 同
洋服屋抱き付くやうに寸を取り 同
引揚者愚痴は巨萬の富ありし 大坂市恒 良
資本家に近づくためのダンス熱 同
乳の子とさじの子抱へ失業中 同

秋深し湯呑に觸れるあたゝかみ 同
犬のごと生れて猫のごとく死す 同
インフレにのた打つ上の醫藥代 高槻市丁 路
なりゆきに任す落目の老夫婦 同
夜開く花へ嵐となる豫感 同
激勵にうなづく口の一文字 同
温かく育つて目指す聲樂家 同
石炭と寶石を考へる夜の吹雪 宇部市 栗 美
陽溜の方へ寄てく配給の列 粗影改メ
風速三十米地上の愛のかそかなる 同
豊年の足に蝗の屍点々 同
柿の皮が上手にむけて戀もなし 同
あたらし生金を追ひ又金を追ひ 大坂市一 甫
菊がたゞ氣品を守る市民寮 同
大臣の望みは持たず藥劑師 同
裏千家素れた戀を見つけたり 同
消ゴムの跡一ぱいの子の日記 愛媛縣大 八
學問がありそなので笑へない 同
記念碑の生きていたなら追放者 同
玄關をまつすぐに出る旦那様 同
百圓札明治時代は腹に巻き 和歌山宏 方
尊さは御目の長さ佛さま 同
草花に涙をためたやうな露 同
子澤山おむつ重要物資なり 同
捨てられた姉に教はる處世術 山口縣ル ミ
カナリヤが死んで娘も死にたがり 同
裾模様選手と見えぬ歩きぶり 同
助太刀が急ぐ舞台に手を叩き 同
水道の音から旅の夜が白み 七尾市晶 二
夜業の灯煙草一本すひ残し 同
人妻として襟足をのぞかれる 同

謹賀新春

(柳人交歓のページ)

清水市下清水四九一 富士野鞍馬	松山市外余土村余戸驛前 前田伍健	兵庫縣水上郡沼貫村小野 戸倉普天	金澤市榮町六六 中島鬼水	清水汪夕 岐阜縣養老郡高田町	福井市豊町四四 弘法	愛媛縣越智郡津倉村 渡邊曉童	宇部市藤山區藤曲驛 國弘伍一 號半休	佐賀縣西松浦郡山代町 楠久九二二 松野えいを	愛媛縣越智郡櫻井町 月原宵明	福井縣遠敷郡遠敷村遠敷 松浦宗七 (帆船)	廣島縣御調郡向島東村大町 吉原善一方 吉原久行
東京都台東區豊住町八 山根亭 横山三星子	鳥取市二階町四丁目二五 大西八歩	東京都台東區新吉原揚屋町四 丸沙路	尼綠之助 出雲市高松	山口縣下松市旭町二丁目 山根白星	吳市吉浦中町一丁目 綠舟改メ 林野甦光	大坂市城東區蒲生町四ノ七 稻葉實様方 竹内潮花	布施市三ノ瀬一丁目四 糸本醉月	山口縣宇部市草江沖 宇部炭鐵内 粗影改メ 上林栗美	敦賀市津内二ノ五 船木夢考	大牟田市瓦町二四番地 高田抱一 雅號抱逸	石川縣河北郡英田村字興津 前田義風

術もなく赤字に生きてゆく下旬 愛媛縣水鏡
寫眞より電話の聲が美しい 同
肥えてゐるその幸福を知らず過ぎ 同
人の爲損する性と云ふ易者 市魁 光
闇列者荷物の數と人の數 同
百圓の旅は朝から立ち續け 同
勤務時間で儲け島で又儲け 大阪市斜 水
よく喋る二人夫婦ではなさそう 同
買出に妻の力の見直され 同
ダンサーになる氣田舎の戀を捨て 大阪市のぶを

浮世繪展にて

あぶな繪は二人離れて眺めてる 同
あんなにして遊んだのかと女聞き 同
出鱈目が儲けまじめが食ひはぐれ 大阪市梅 里
醫師の計へ藥石効なくとも書けず 同
手紙見て飛んで來たのが一七日 同
ドレミファ闇成金の音がする 徳島縣夕 鐘
人使ふうつわでないに天降り 同
酒も自由販賣なれど寝てこませ 同
同權になつて女の忙がしき 布施市醉 月
三十年勤めて巡査失調て死に 同
月見宴月の談も宵のくち 同
復員のいゝ髭だけに哀れなり 長野縣柳 兒
眼鏡ふきく盲判など押さず 同
寄附帳へ新圓抱いて素直なり 同

豊作

早魃の天を睨んだ日も忘れ 香川縣迷觀子
北からの便りで嫁ぐ娘の哀れ 同
二人目の父だ北風吹いてくれ 同
奉公袋に今は小麥の種を下げ 石川縣義 風
ソ連領に生きるばかりの記事の夫 同
北國に陛下をお迎え申して 同
人民天皇に問いかけられて胸迫り 同

生きて居た街路樹低く葉をひろげ 大阪府克 己
大阪驛皆んなが走るから走り 同
なかなかのやり手だつて褒めて居す 同
客よりもはたへ聞かせる易者なり 大阪府浩 三
新婚は退け時のそら氣にしている 同
奥の間へ通れる程の無沙汰をし 豊中市柳 堂
赤裸々な夫婦へ父のまだ若し 同
ベイトーベンダイル廻せば株の値に 大阪府純三郎
ラツキーセブン同點となり停電す 同
グッドバイサンキューと子供退院し 大阪府三 郎
夕焼小焼茄子に止つた赤トンボ 同
切なさは蒲團に顔をうめて寝む 貝塚市一 郎

療養回顧

月よりの使者あり肺患卑下をすな 同
コソくど儲けこそく生きてゐる 大阪府鬼 八
文學を語れば夕日背に寒く 同
つるし柿下から順にへつてゆき 神戸 戸美代子
停電へ月の明りのすゞぎもの 同
臨終に會つて歸れば猫がじやれ 石川縣光 郎
よい嫁御姑好みのパンを焙き 同
この邊は何釣れさんねと邪魔を入れ 布施市千 里
サイレンの鳴る程火事は燃え居す 同
大阪も廣くてせまい人に會ひ 石川縣夏 波
百姓であれば胃を病む恥しき 同
家族給だけはつとめる氣で通ひ 神戸市凡太郎
煙草巻く時の根氣を笑はれる 同
提灯屋赤丸ばかり書きつゞけ 大阪府可津美 弟
は 野 球 妹 寶 塚 京都市巷 歩
言譯に行くのに立派すぎる下駄 金澤市冬思夫
叱り乍ら繕ひもして着せてやり 大阪府葉菜子
彼女とは誰が爲めに神の作りしか 大阪府露 芳
當直にうちわ話を聞かされる 大阪府良 子
剃刀に委せ切つたる顔にして 鳥取市半 茶

東京都豊島區高田本町二丁目 川柳きやり吟社 主幹 村 田 周 魚	東京都文京區宮下町六 川柳界社 主宰 合田 笑 字 坊	堺市曙尾宮本町 (曙尾神社南二丁) 曲豆 西 村 豊 稻	堺市霞ヶ丘町一二七 小 坂 英 三 慈雨來	喪中年賀欠禮 福 田 山 雨 樓 ヨコハマ・保土ヶ谷・岩崎町二	京都市中京區姉小路通 鉄屋町東入 藤 本 蘭 華	奈良縣生駒郡平群村吉新 平群診療所 月南 高 橋 多 佳 次	廣島縣賀茂郡竹原町 竹原專賣出張所内 柳 慶 弘 津 慶 一	八戸市糠塚字長者山三の二 清水田方 西 塚 春 魚	藤 岡 至 藝 瑠 東京都中央區日本橋本町六 稻畑産業株式會社東京支店	池田市井口堂一六四 戸 田 古 方	かにの目川柳社 森 下 冬 青 金澤市大衆免片原町	今治市日吉町 鳥 生 古 弗
山口縣大島郡久賀町本町 吉 川 亞 人	高槻市郡家新町六五一 福 田 貞 次 號 丁 路	大阪市旭區森小路町七六〇 (大宮電停東) 北 山 悟 郎	秋 月 宏 方 和歌山今福北部云	長野縣須坂町 高 峰 柳 兒	津山市京町七〇 西 井 理 夫 號 春 峰	熊本縣八代市河原町八〇七 佐 野 ト 占	和歌山縣西牟婁郡沼津村 見老津 生 田 翠 夢	東京都大田區調布嶺町二ノ只 三 澤 沙 風	群馬縣前橋市紅雲町二四 有らへ舞い 櫻井長幸	敦賀縣桑川柳會 角 野 素 風	奈良縣生駒郡平群村樫原 川 柳 む つ み 社 深井凡々	大阪府三島郡春日村大字郡九〇 淺 田 五 一 郎 (鴨 水)



柳樽の選者 吳陵軒木綿

富士野鞍馬

從來柳多留は二十四篇までと三十、三十一編が初代川柳の選句集であるからよい句があり参考になるが、その他は駄句、狂句が多く、殊に文政以後の四世川柳が狂句を稱えてからいつそ墮落しているから讀まぬ方がよいと教えられて、そう思つてきたが、初代川柳の選は前句附万句合層摺のことで、その多數の万句合の前句から少數を木綿が選んで柳樽をこしらへて、吳陵軒可有という別號で編んだのが柳樽のはじまりである。そして終命の天明八年迄それを續けて、明和二年から毎年一冊づつ二十二編まで選をしていく。勿論その原句は川柳評万句合であるが、柳樽へ登載すべく選んだのは木綿であるから、柳樽初篇から二十二編までの選者は木綿であるといふのである。それを柳樽にはいつも川柳評としていふところ、木綿の床しがある。

に「さみだれのつれづれに、あそこの隅この棚よりふる」としの前句附のすりものをさがし出し、桃の上に詠むる折ふし、書肆何某來りて、此儘に反古になさんとも本意なしといへるに喩かせ、一句にて句意のわかりやすきを擧げて一帖となしぬ。なかんづく當世諷風の余情をむすぶ秀吟等あれば、いもせ川柳樽と題すと述べ又二十二編の序に「花のあしたより月の最中雪の夕べまで、言の葉ぐさのつきせぬたねの功なるえらみを書寫してとし、やなぎだると題するも、此道のなかつともなり好士考士のむつまじきをねがふ事」と云へている。若し木綿が右にいう様に万句合層摺から選んで「柳樽」を編まなかつたら、層摺の前句は反古になつて、壁の腰張か襖、屏風の下張に終つたのであつた。ところが種々多數の万句合のあるうちで川柳評のものを選んだのは當時川柳評が一番多く又面白い句が多かつた爲である。斯ういう譯で

二十二編まではたしかに木綿の選であるのを今まで忘れ勝て、原句の評者川柳のみをいつてゐることは再考を要する。木綿の選がよかつたからこそ、柳樽の價値が出て、又川柳も木綿に金箔をつけてもらつたのである。

「一句立にて句意のわかりやすき」と万句合から木綿が選んだ柳樽の句は、今吾等が「川柳」と稱して作つてゐるもので難吟にあたるのである。元來前句附は十四字の題句を出して十七字の前句をつけるので、俳諧附合の稽古に始まつたものであるから、今の言葉でいうと題詠にあたる。柳樽より前の「武玉川」の選者慶紀逸はこれを「附句」といつて、いつも俳諧附合の味を説き「三句わたり附合」のことを云つて、その附句が一句立になることをすすめてゐる。随つて三句わたり附合であるから十七字の前句もあれば十四字の後句もあるから「武玉川」は誹者であつて「附句集」であるが、柳樽は「前句集」であつて、その前句が今の「川柳」に續いてゐるのである。木綿は柳樽二編に「當世の前句は俳諧の足代ともならんや」とハツキリ「前句」といつてゐるし、天明の「川柳」の序文にも朱樂菅江は「前句」として迷へ。寛政の「古今前句

集」(後柳樽拾遺と改題)にも「前句」「まえ句」として序文にある。尙文化、天保の柳樽に

前句師で金箔付の生き佛

(柳百十七)

年中用立つ前句師の層摺

(柳百十九)

下女居候に曰く前句師はよく

いれ (柳百三十四)

といふ様な句が見えるところ等から考へて、文政七年に四世川柳が「狂句」という獨立名をつけてからでも、すつと「前句」と稱し、その作家を「前句師」といつたのであることがわかる。つまり「武玉川」は附句であり柳樽は前句であり、これ等を今古川柳といひ、明治三十七年以後の句を「川柳」ということが考へられるのである。

柳樽とは婚禮の祝に持つてゆく平たい酒樽で(角樽とちがう)「この中にうまいものあり」といふ意や、「滑稽は酒器也」といふ漢學的の意から、前句集の題名にしたらしむ、と「吳陵軒可有」と別號したのは「こりようけんあるべし」のシャレと思はれる。ところがこれ程川柳道の忘れることの出来ない大功勞者の住居や人物が今迄ハツキリしてないが、初篇に「淺下の麓」十九編に「淺下境」とありその末尾に「吳陵著」と署名しその下に、「下谷」と

品質優良

ペン先・針ピン・セムクリツブ

立川ペン先製作所

上野市

清談・商談
お待合せに

喫茶
みどり

みどりで商談
運が向いて来る
上六交叉點西北角

「木綿」との二つの印があることから考へて淺草寄りの下谷の住人と推定され、七編の序文に「絹布に正札あり」と劈頭に述べてゐることや、「吳陵」といふ「木綿」といふ、これ等から吳服屋の主人のようにも考へてもいいのではないかと思ふ。そして上野の櫻木連の頭目であつて、八編以後にその句會の句を毎編載せてゐる。これは強く云へ

ないかも知れないが、十八編の扉に「末摘花初篇後篇出」と廣告様に書いてそのあとに「吳陵軒著」の文字と「木綿」の印がある。そして「末摘花」後篇(二編)の序文に「あさくさ、似寛軒著」とある。柳樽と同じ花久の出版である等から「末摘花」初編と二編は木綿の選編ではないかと考へてみた。そして三、四は「和笛」の選編ではないかと考へてみた。以上は何れも推定であるが、「柳樽」を通じて天明八年五月二十九日に亡くなり、その辭世「雲晴れて誠の空や蟬の聲」はハツキリしている。その翌年寛政元年の二十三編は三代同語涼軒が出しているが、その序文の人「如狸」は木綿の女婿の同音のシャレだつたかも知れないし、その前後にも二代目、如狸、の名は柳樽に見え

ないところから察すると、木綿の遺稿を補足して出したとも見られるのである。柳樽のその後は二十四編を花洛庵一口が木綿のやり方を踏襲したが、原句の万句合が寛政以後になつたので、二十五編からは万句合によらず柳樽への集句を和笛が選して二十九編まで出たが、和笛の歿後又一口が残り万句合から三十編を出し、三十一編は神社奉納額の川柳評のものを集めて王章が編み、三十二編からは代々川柳の外毎編数人又は十数人の選者の選で文政天保と調子が落ちて、柳樽は天保九年の百六十七編で終つてゐる。三十二編以後の選者として特に目立つのは文日堂礫川と四世川柳である。

斯く考へてくると柳樽のよい句というのは木綿の選であつて、「川柳」の基を築いてく

思つた。近所の子が二、三人居たが「小父さんこの狸いつ化けるの……化けたら知らせてよ……何に化けるの……」と聞かれ、アヤフヤな返事をしつゝ頭の中で百万圓に化けたらスバラしいがなあと思ひ、大金大キンを思ひ出して脊を丸めて、のぞき込む事しきり、ハテナ……傍らより富田夫人云はく「一伍従さんだめよ、それはメスですよ」に……あゝさやか。

れたのも木綿であるといふことが云へる。改めて吳陵軒木綿先生に感謝と敬意を表し、川柳忌を營むと共に『木綿忌』も營むべきではないか。そして現代川柳はこれを深く察して、三十二編以後のただ句會の題詠の實選句をそのまま冊子に發表されてゐるつまらなさを知り、題詠から雜吟で通る句を再選して發表し、又雜吟創作に注力すべきであることがわかる。

序に木綿作の句を柳樽から拾つてみると五十四句あつて、どれも秀吟であり、無理な句や、難しい句はない。これにも木綿の人柄がうかがわれる。その五十四句から鞍馬選といふのを添えてこの稿を終る。

大 き ん

(はがき原筆)

前 田 伍 健

蕪村の新作摘に結城の丈羽の宅で毎夜狸に戸を叩かれたとあり、狸は尾で叩くにあらず戸に脊を打ちつけて叩くと記してある。親友富田金鼓堂氏方に放ち飼ひのたぬきが居るので時々見参に行く。或日見ておるとその狸公三尺位跳躍して續けさまに、月に全身を窗のようにして打ちあてて。蕪村の云う、あれだと

—— 松山・愛媛川柳
文化連盟會長——

謹 賀 新 春

(柳人交歓のページ)

阿倍野區旭町三丁目一四

須 崎 豆 秋

御無沙汰をかためて詫びる
年賀狀

吉 田 水 車

名古屋市中種區觀月町
一丁目三番 電話 東大六六

大阪市阿倍野區王子町

菊 澤 小 松 園

三ノ三四

大阪市東住吉區平野

西之町八三

橋 本 緑 雨
橋 本 美 奈 子

御無沙汰を謝す今後共
よろしく

酒 井 駒 人

東京都品川區西戸越三ノ六番

濱 田 久 米 雄

岡山管理部旅客係
岡山縣和氣郡英田村

三 條 東 洋 樹

神戸市生田區榮町二丁目三番
(三和ビル三階)
太平木材株式會社神戸支店
電話 三宮 三七九五番

今 治 市 神 明 町

長 野 文 庫

下關市幡生町宮ノ下
北坂方

櫻 川 不 水

東京都港區芝南佐久間町

一ノ五二

高 須 啞 三 味

名古屋市中區幸樂町

二ノ一八

伊 志 田 孝 三 郎

東京都台東區豐住町十一

山 路 星 文 洞

靜岡市中田町一ノ二〇

落 合 落 瓢

大阪市南區西櫓町二一

脇 田 梅 子



古城の窓より「下」

川柳と俳句の區別

山路 閑古

俳句が俳諧歌仙の發句から、川柳がその平句から發生したものであると云ふことは、單に論旨を簡明にするために、左様に述べたのであつて、實は歌仙形式の確立する前に、すでに兩者のスタートはある譯である。しかし結局は同じ理窟になるのであるから、便宜上、後で出來た歌仙を土台として、倒敘的に話してゐる譯、その点もよくと御了解を得たい。さうしない

と話が混み入つて、えらく六ヶしくなつて了ふのである。俳句は歌仙初頭の唯一句、川柳は残りの三十五句の平句全部を占めてゐる。

俳句即ち發句は、季だけ詠めば能事終るのであり、作者の感懐は、その季を通じてそれとなく情趣的に示される。決して露はに感情を歌ひ上げるものではない。これが所謂花鳥諷詠の精神であつて、發句の分際を守り、一方に俳諧の存在をも認めるといふ行き方である。この一派では、俳句

で云へないことは俳諧に掛ければいふといふことになつてゐる。

平句の三十五句は、序破急終の四段に配置され、浮世萬端の姿がこれに表はれて来る。神祇、釋教、戀、無常から、動物、植物、地理、天文、歴史、科學、何でも御座れである。ないものはないから、従つて季もある。

平句の中に季のあるのは、右の説によつて毫も不思議はない譯だが、尙序破急終の配置に關連して、二花三月と云ふ式目があり、これに附隨して、春季、秋季の數句を平句の中に混することになつてゐる。斯様に二様の意味から、平句には、春夏秋冬の季を持つた句が、少くも三分の一以上含まれて来る。

日本人の趣味の中には、（これは東洋人と云つた方がよい。季節文學としては支那の方が先である。）季節の趣味といふものが可成り大きく働いてゐるから、俳諧に於て

も、發句だけに季を預けて置くのでは満足されない。やはり平句を通じて、季節の流れと云ふものはあり、その高低の目安として、月花の座がきめられてゐる。要は季節のサイン・カーブが描かれるやうに工夫されてゐる譯である。それで三十五中、十二三句の有季句が配置されることになる。

かういふ有季の平句といふものは、いはば俳句と川柳の合ひの子みたいなもので、これを俳句の分野に置かうとするもの、川柳で確保しやうとするもの、それ／＼の立場から勝手な理窟を並べて、柳俳の分野を攪亂してゐると云ふのが、今の俳壇、柳壇に見られる奇現象である。

俳壇の方から云へば、新興右派、人生探求派といふのがこれに屬する。何れも有季であるが、前者は調子の上で舊踏を脱せんとし、主として切字を揚棄し、短歌の上の句のやうな形にしてゐる。後者は人生百般の葛藤を十七字に盛らうとし、兩者ともに期せずして平句化して、川柳の領域に入つて來てゐるのである。柳壇を覗くと云ふと、これは又季語に重点を置き、季に託して感懐を述べると云ふ手法を用ゐてゐるものが多い。

唯や、かなの切字を用ゐないから、俳句とは區別されるやうなものゝ、最早イデオロギイに於ては俳句である。季を立て、季を通じて情趣的に感懐を漏すと云ふのは、發句の行き方であつて、平句のそれではない。平句はたとひ有季でも、感情が露骨に示され、季はむしろ従になつてゐる。だから右の如き川柳は、平句の土俵を割つて、すでに俳句の領域に入つてゐる譯である。

川柳に季があるからと云つて、直ちに俳句ではない。それが俳句であるかどうかは、一二句とつて見たところでは決定し難く、要するに作者の態度によつてきまることである。

又これと同様、俳句の一種を見て、形式的に川柳に歸してしまふのも早計であるが、季があるから、すべて俳句だとは斷定が出来ない。しかし俳人の中には、平句の有季のものをすべて俳句の領域に置いて考へてゐる人が可成り多いやうである。

事の誤りは何處から來たかと云ふと、それは前文の小泉迂外氏の手簡にも見えるやうに、「子規の偏見」から來てゐるものと思はれる。子規が發句と云ふ言葉を殘

女性のために

ワダカルシューム錠

して置けば、比較的この誤りは少なかつたと思はれる。假にも發句とあるものに、平句は出來ない。又その間の區別はつきりする。然るに子規は發句と云ふ言葉を廢して、俳句に替へた。子規の考へでは、發句も俳句も同じであつたであらうが、それは俳諧を抹削しての上の命名である。俳諧が抹削されない以上發句は別にある譯で、發句と俳句と二つの言葉が文學の上に殘ることになると、おのづから俳句には、子規の期待しなかつたやうな意味が加はつて來る。解釋の如何によつては、俳句は必ずしも發句とは同一

でなく、廣く俳諧の句を指すことになり、即ち平句の領域を侵す傾向を生ずるのである。つまり俳句といふ名の下に、川柳をも包括せんとする譯である。

この様な横押しに對して川柳は、甚だ無抵抗であつた。且つ、それにしては川柳といふ旗印がまことに貧弱である。實は昔川柳と呼ばれたものゝ實質は今日もう残つてゐないのである。川柳は川柳点の略語であつて、寛政初年にすでに柳翁の死と共になくなり、後は狂句と呼ばれた。明治の中葉から大正に掛けて狂句は清算せられて、新しい民衆詩が生まれて來たのであるが、この時これに川柳と云ふ復古的名稱をつけた。それは決して誤りではないが、少し弱かつたかと思はれる。少くも理論的にびつたり來ないものがある。昔の川柳かと云へばさうでもなく、吾々の古川柳と名づけてゐるものが、今日そっくり残つてゐる譯ではないのだから、川柳はどう見ても有名無實なのである。且つ、發句を除いた三十五

句の領域が悉く川柳だと云ふやうな雄々しい宣言も聞かれなかつたやうである。傳統を調べて見れば明かにさうであり、立派な藝術であること疑ひないのであるが、先づその

名人と無筆

(ハガキ原稿)

高安六郎

すべて一藝に秀でるものはそれと逆比例してほかでどこかヌケてゐるのが普通である。それを世間では万事に通じると妄信してしまふので現實に直面してアツと仰天させられることが多い。實際はそれほどでもないと思うが、菊五郎の無筆問題もその例の一つで、あれほどの善舞でも素袍落や身代座で狂言ものゝトボけた味が出てく。あの鋭敏な六代目だけにこの話が一層皮肉にひびいて興味をそゝるのであつた。

顔見世や名人は皆阿呆なり
——大阪・醫學博士——

前に俳諧歌仙といふものを、しつかりと打ち樹て、その前提の下に川柳があるのであると云ふことを理解せねばならぬ。この認識が

チと足りなかつたので、右様の宣言も聞かれず、又俳句に對

謹賀新春

(柳人交歓のページ)

大阪市住吉區濱口東二の四
番傘川柳社

岸本水府

伊丹市下河原一六六

岩崎柳路

岩崎松代

川柳雜誌社久賀支部幹事

岡村路三

山口縣大島郡久賀町
電話 久賀局 三番

大阪市阿倍野區天王寺町三番
電話 天王寺 二二三番

實文業を始めました。川柳關係の外、主として中國の人情民俗劇、酒、女、飲食物、動植物等に關する情筆、讀み物等の執筆の求めに應じます。
川柳非詩堂主人

石原青龍

東京都目黒區中根町八七

大阪府中河内郡柏原町本郷

宮岡白峯

宮岡公子

喫茶に・商談に

魚安

西本三笑

金澤市榮町通
電話 四六六五番

川柳雜誌社金澤支部

大阪市阿倍野區帝塚山
西一丁目十一番地

木下幽王

三重縣上野市丸ノ内一三三

八木辰子

抗するやうな立派な名稱もつけられなかつたのであると考へられる。
さういふことを思つて見ると、俳句といふ名稱はなかくいへば、伸縮自在で、古風な極右の花鳥諷詠から、(これは古壺新酒と云つて、古壺であることを敢て自任してゐる)無季、自由律まで、俳句と稱して大して矛盾を感じない。
と云つて、川柳も今更俳詩だの、草詩だのと改名しても始まらぬ。川柳は川柳でよろしいから、充分にその分際と限界とを自覺し、さうした自覺の下に行動すると云ふことが大切で、最早道はその一つしかないと思はれる。
俳句の背景には芭蕉俳諧があり、これが俳句藝術の根據となつてゐる。小生をして云はしむれば、川柳の背景にもやはり芭蕉俳諧があるのである。柳家は須く活眼を開いて、芭蕉七部集を繙くべきである。柳多留すら俳風と銘を打つてゐるのであり、今日の川柳も俳諧と終始すべきものであること、斷言して憚らぬ。さうして藝術の基調をこゝに置かねばならぬ。
俳句と川柳の區別に關する言説はこれで終り。次は川柳と狂句の區別であるが、何れ又氣を替へて申述べることにしよう。





艸樂追悼會

於一運寺
十一月廿三日

十月十六日に永眠された川柳不朽洞會員紳樂西田竹治氏の追悼會を開催した。案内運着と會場臨時變更のため比較的參會者の少なかつたことは遺憾であつたが、會場の期せずして神社から寺に變更され、靜かな部屋でいゝ集りであつた。席題、兼題が披露されてから、路郎主幹によつて「紳樂を語る」が談された。談しゆくうちに主幹の目には涙が宿つてゐた。最後に故人の令息西田克己氏の挨拶があつた。

(幹事)

出席者 路郎・淡舟・溪堂・豆秋・白峯
終雨・樂奈子・照子・角嵐・香林・千舟
定風・方よし葉平・古泉・千里・幽王
茂・博也・白柳子・克己・鮎美・竹莊
葉光

親なればこそ刺繍の出来る文
日曜日風呂をすませて書く手紙
親からの手紙で藝妓金を借り
結婚の招待検閲されて落き
喰う事ばかり書いてくる手紙
封筒を缺て切るのは寂しい日
手紙では書けない事で母来る
戀人の手紙嬉しくためてある
警察からの手紙へまなぶのをきかぬ
やつぱり大阪がよいと書いても手紙
お使ひに出たら入れ度い繪封筒

選郎路生麻鹿「一」越雲

堂
葦
竹
万
千
舟
美奈子
葉平
万
竹
莊
幽王
美奈子
角亂

スタンで押へてかへる置手紙
 ラブレターそれから又来たて届けられ
 父として民主の手紙書く日也
 催促の手紙も來てる今朝の膳
 巻紙にそと秋風を封じたり
 絶交を候文でためらわす
 手紙では戀しいなごとかいてさ
 母の文用件だけですまぬなり

白柳子
 葉光
 鮎美
 白峯
 葉平
 角亂
 路郎
 同

「兼題」「同僚」 水谷鮎美選

見こまれて同僚養子にいつたま
同僚を待つ北風の寒いこと
同僚の事務とは別な諸ひ聲
同僚の新婦に會ふ戎橋
同僚は別にギョウザン儲けてゐ
同僚のまだ抜けきらぬ京訛り
おもちや屋へ付く同僚を羨む日
同僚と箱膳の日をなつかしみ
あけすけに同僚の心の親しまれ
同僚の酒もおんなじやうに吞分
同僚を訪へば買出しらしい留守
同僚で申し合せた祝なし
同僚のかにまるくあり温き灯よ

光 淡舟 萬よし 白柳子 博也 角亂 香林 同 万よし 幽王 鮎美

兼題「藥」 武部香林選

お祖母ちゃん育ちお薬大好きで
赤チンを塗つて陽子の兒が戻り
慢性になつて漢藥買ふて來る
はたち代藥もピンク色をより
劇藥へ想ひ余つた手が延びる
飲み過ぎと聞き藥劑師舌を打ち
煎藥へ氣永に癒ゆる日を信じ

光 葉平 淡舟 鮎美 照子 溪堂 角亂 艸樂氏の靈に

藥草のにほひのなかに安らげき
子の手煎藥としての酒を呑み
氣やすめの藥吞ませてゐるつも
よく似た藥近所にもすゝめ
奇蹟奇蹟藥はきかぬものなのに
膏藥の外は知らない母達者
借金のことわり藥袋みせ
モチンへ男一匹とび上り

鮎美 幽王 美奈子 竹莊 白柳子 千舟 竹莊 博也

ふところ手持藥の箱があたたまり角
藥袋嬉しくやぶる退院目竹莊
極樂へ行ける藥をせがまれる香、林
席題「雨」 清水白柳子選

名鑑のしぐさたちまち雨がふり
雨傘の下で薬草眺めて居
雨の日も出かける父に感謝する
ゴム靴で雨おもしろおもしろ
背中だけ時雨にぬれる地藏さん
びつしよりと濡れて聞屋も樂でなし
本降りに強盗休む事に決め
逢へば足る人と雨だれきいてゐる
人情にうえて港の雨にぬれ
雨ふれば風ふきは戦傷の手をつく
工場はストブラカで雨の中を行く
雨は静かに柘榴は朱しおとめ
いゝ雨にほうれん草が動いてる
鶏小屋へ卵見にゆくだけの傘
コスモスに故人を偲び雨をきく

茂 緑 緑 豆 千 幽 角 同 同 菜 豆 鮎 美 秋 千 白
雨 舟 雨 雨 舟 舟 王 胤 平 同 同 同 同 同 柳

停電が点いておかしな額をする
 停電を何故と聞かれて母固り
 停電の不平等もなれてなが話
 停電の妻はピーマをみあはせる
 停電の中でおむつたオシッコだ
 また職とばして停電へごなつてゐ
 停電になつて子供の歌を聞き
 停電の天井にもれる天の川
 停電を冒険してまゝと殺氣だち
 停電に夫婦喧嘩の出来もせず
 停電へ茶碗の音は續くなり
 停電の町を煙草が一つ来る
 停電に書きかけたまゝ二三
 停電になれば驛迄読みに行き
 停電に小さい愚痴を許し合ひ
 停電へ恐くないよと抱いてやり
 停電の爐邊談話は角が立ち

淡舟
 白柳子
 緑雨
 同舟
 同博
 美奈子
 舳美
 香林
 同
 白峯
 竹莊
 白柳子
 千里
 竹亂
 角莊
 万よし

選
 選
 選
 選
 選
 選
 選
 選
 選
 選
 選
 選
 選
 選

「警嘆ひ」
 五
 選
 葉
 平

これ丈は賣りたくないが米になり

版寫膽田阪

大阪府北區芝田町五二
株式會社 阪田商會

番九三六一 島福 話電

賣喰ひを以て引揚の父を待ち
米にした羽織と出逢ふ女風呂
賣喰ひの里ももうすゝ知つて居り
賣喰ひの最後の子を模様
賣るものがなくを頃に子が死んで
賣り喰ひにまだ手放せぬ犬があり
賣り喰ひによその相場も書いてみる

淡舟
同子
照葉
平柳
角亂
茂

洗濯・偏窟・蚊張
 御時世だ女中の分まで洗はされ
 別れても洗濯には行きさす
 洗濯も一竿ですむうちはよし
 洗濯が好きで料理の下手な事
 シャツ洗つてまじろ何だ世帯染な
 よこれもの洗つて淋しく彼女去に
 洗濯へ天下御免と腰を出し
 偏窟は偏窟として丸められ
 俺も偏窟が友の少き
 偏窟の息子はあまりにじよなく
 自覺せぬだけに偏窟手をやかぜ
 秋風が蚊張の青さを深うさせ
 不意の客失禮ですが同じ蚊張
 蚊張はまだ釣つた、なまいい月夜
 好 松 喜 同 好 松 喜 同 好 松 喜 同
 郎 夢 堂 生 郎 夢 堂 生 郎 夢 堂 生
 九 月 二 十 日 於 訪 諏 森 會 館

蚊張を吊る男みじめな程にやせ 喜代志
蚊張出せば去年のにはいりてゐる 百生

十月十九日

せつちかち・電報・食慾・掃除
積木する子にも短氣な所が見え 百生
せつちかちでなうも糊の立つて 生々
せつちかちがゐる正席のケリが 吉比
せつちかちでこのネクタイの結び 同
せつちかちの彼氏學者の列に 路郎
祝電一束今宵の部屋へ届けられ 吉比
電報は心配させたまふこと 百生
惡筆へ電報と云ふ重寶さ 生々
連想が食慾不振に陥れ 百生
拭掃除せつちかちやつて客は来す 同

十一月九日

無口・國訛り・同窓・靴みがき
なめられた様で無口へ痢を立て 生々
世をすねた様に無口は笑ふ丈 同
指導者は案外何にも言はぬなり 同
ボナスの重さ無口にしてやれ 同
愛嬌のよさはあはれの國訛り 同
その土地できけば訛りもつく 同
どこへ行かう大阪で押し通し 松夢
國訛り九州でせうと戀しが 生々
國訛りはつきり出して酔ふて 同
縣人会連のいらぬ國訛り 松夢
あつた山や川が育てた國訛り 同
末席に同窓ですと言はれて居 路郎
同窓であるが貸しては呉れぬ 同
同窓が諸も同じ 觀世流 同
同窓もあちらは昔屋に住む身 同
同窓會恩師清くもやせ細り 松夢
同窓だ構ふもんかと押しかけ 同
境遇と別に同窓飲みあかし 同
同窓會ニツクネームで語り合 松夢
同窓の誼みは誼み検べられ 溪堂

久賀支部句會

十一月四日 於路三居

洋裁・火鉢

裁ち鉄氣にする程の腕でなし 天満里

御主人はごなたか迷ふ洋裁屋 亞人
スタイルは洋裁店主と云ふところ 路三
万に備へ洋裁身につける 猪太郎
來客へ火鉢の位置を少しかへ 三休
病んでゐる火鉢の上の手の白さ 路三
名案もなく火鉢の冷えて行く 朗々
強盗の記事を讀んでる股火鉢 亞人

岡山支部句會

十月十日 於久米雄居

備・前・川・柳

備忘録中は映画の事ばかり 不二雄
戸閉りをもう一度見る腰を上げ 久米雄
高島田嫁く前の日の匂いして 同
妻見の前で樂しむ年となり 五九童
急用は川向うからなつてい 火蜂
身投げした川とは見えぬ流るなり 久米雄
貸ボートが有つて繪になる柳の木 不二雄

十一月二日 於久米雄居

仲人・花嫁・新婚

仲人の汗氣の毒な程に落ち 久米雄
花嫁へ獨身者の目がきつい 同
新婚の誓うれしくなつた 同
子の義理を親が見てやる年の暮 不二雄
民主主義通せば義理がちと悪し 牛仙

十月四日 於禁酒會館

雜詠・サイレン・鉛筆・汽車

米持參安宅の關を三度抜け 聰夢
配給の身には過ぎたり今日の月 通常
明月の下に小さな灯をともし 同
あれからの母サイレンを毛嫌い 大甲帽
あの頃の音でサイレンを告げ 通常
サイレンえもうゲートルに用がなし 聰夢
鉛筆でついでにかゆいとこまき 北星
鉛筆を二人で握りアイウエオ 稔
女學生汽車通學をふとれたみ 風來子
汽車の時間として腰が浮いて 伯峯

句會控室

句會も賑やかになつて來た。少うし人
心が落ちついて來たことのアラワレと
觀てゐる。社會黨もチト川柳會でも開
して人心安定の路を指し示さうだ。右
と左で小ぜり合ばかりしてゐるのが能
もないぜ。大阪では井上良二君あたり
川柳を作らしたうまいだらうと思ふ
がどうだらう。

本社句會へ出席希望の方は、本社句
會案内係へ句會案内登録方を申込ま
れたい。

山路閑古主催

隨筆・小説・歌・各大家
俳句・短歌・執筆
古川柳・新川柳

古川柳(月刊)

A5版・32頁・定價十五圓
五拾圓以上を左記へ

中込所 福岡縣福岡市私書函第九號
日本古川柳學會

九州支部

次號主要目次

川新大阪風物
句評の生理
續・川柳講座
淺間の煙
柳の和笛
愛媛柳人記

◎其他記事、句稿、句報滿載

田村孝之介(画)
川柳不朽會員(句)
福田山雨樓
麻生路郎
沖野岩三郎
富士野鞍馬
東野大八

社のサーピス部

からのお知らせ

路郎主幹の揮毫作品左の小規に
よつて同好の士にお頒ちいたしま
す。

短冊
同(新年四季) 一葉 七五圓
色紙 一葉 三〇〇圓
同(新年四季) 一葉 一〇〇圓
軸額(小物・表装なし) 五〇〇圓以上
先生の作品で御希望の句があれば御指
定願ひます。申込めと同時に半金お届
け願ひます。揮毫作品が出来たらお知
らせいたします。

本社二月句會

は一日午後一時から阪堺線
住吉交叉点東一丁一還寺で
開催いたします

▼争闘に明け、争闘に暮れてゐる日本の政治家をあげればみなが春を迎えた。▼一九四八年の本誌は一大飛躍を期してゐるので絶大な支援をお願いしたい。▼本誌では

は記事が輻輳したので、新春だけ休講した諒想を乞ふ。▼日本柳川柳名簿の礎稿にしたいと思つて、柳人交歡廣告を募つたところ多數應募されたので欣快に堪えない。これは引續き募集することにしたので、今回の分に洩れた方々には至急申込んで頂き、掲載料は一トロ口三十円（幾日でも）、柳人交歡廣告はお互ひの住所を知らず目的の廣告は本規定に據らないので直接談されたい。（路）

厩舎普天氏（兵庫縣）は本年還暦に相當するので「親しめば土にちがつともうそがなし」の句碑を裏の山に建てられるそうだ。遙にお欣び申上げる。岡村路三氏は十一月十九日、天王寺町の宅で路郎師と歡談され、その夜歸賓の途につかれた。古川風竹氏（ハワイ）から第三回目の國際慰問小包が寄せられた。路郎氏夫妻感激。路郎

近作柳樽(雜吟廿句) 麻生路郎選
川柳塔(雜詠) 麻生路郎選
文章(評論・研究・感想其他)

▲投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▲「近作柳樽」は一般作家の雜吟を募る。
▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。

▼山根農人氏 松江は堅町合銀前
で古本と川柳の店山根書房を開店
された▼杉谷湖山氏（鳥取）は十
一月廿九日に今息七郎君を裏（取）
た謹んで悼む▼大西八歩氏（鳥取）
大森風來子氏（岡山縣）は十二月
十四日の本社川柳忘年大會に出
席された▼池澤榮居氏は大阪府南
河内郡富田町須賀光山莊へ転居
された▼前田伍健氏（松山市外）
はその昔、五剣と號してあられた
のを秋山好古大將の命名で五健と

號し二十何年間後の縣下川柳大會で會集一同から、五健の五の字に突張棒一倒れてはいけなと上の字にある伍の字に命名されたので欣んで改號をされたのだそうである。縣下の柳人から慈父のやうに慕はれてゐる同氏の人格が偲ばれる▼
詩子省二氏(愛媛縣)から内子短経門の旗をおとて老知識人に川柳を鼓吹するとの快報と共に「掌の王子を拜む息を止め」の句を寄せられた。

柳吟社主催、北國毎日新聞社後援の出版文化祭協賛柳大會が十一月二十三日に小坂神社で開催された▼熊本川柳會の發足會が十二月七日に水前寺に於て開催された田中辰二、大島壽明氏等が顔を見せられた▼愛媛縣川柳大會が十一月廿三日八多喜聚臨寺に於て開催され佐健、省二兩氏出席盛會であつた▼川柳むつみ社（奈良縣）では十二月七日に高橋月南氏の選撰祝賀の會を開催された▼津倉川柳吟社新春記念川柳大會（愛媛）が一月三日午前九時から高龍寺で開催される▼前田義風氏（加賀）通信では物價高で卵一個が十一円五十錢になつたそうだが、大阪では十八円してゐる。一個で六円五十錢の開きがある。ヤミ屋が眼

本社の十一月月會は二十三日午後一時から西門柳榮を偲ぶ會として佳吉の一運寺で開催した。濱寺支部月會が十一月九日松夢居で開催され、路郎主幹出席、濱寺支部月會が十一月十一日開催され、路郎主幹出席、大阪逓信病院柳會が十一月十九日午後二時開催された。路郎主幹出席、本社柳會が十二月十二日午後一時から一運寺で開催され、句會三分條與七分といふ前例のない川柳人の餘興がうけて盛會を極めた。扶桑金屬の忘年川柳會は十二月十一日午後四時開催、路郎主幹出席、大阪逓信病院忘年川柳會は十二月六日午後一時開催、路郎主幹出席、濱寺支部一周年記念川柳會が十二月廿一日諏訪森會館で開催された。盛會、路郎主幹出席、千石莊川柳會は十二月廿七日開催された。路郎主幹は十二月廿八日、大阪中央放送局で「歳末のユーモア」を録音、翌廿九日午前六時四十五分市民の時間に放送。

川維岡山支部では十二月二十日久米雄居に於て忘年句會を開催した。

石川縣川柳文化協會並びに縣下川

高級化粧品容器には硝子！

ヤマギンの……

黒硝子

大坂市大津區長町
西通一丁目四十四

山 銀 株 式 會 社

電話：關西四七番


血圧降下には
アーグレミン 注射
 血管アクトナルモンとアミン塩類
 山之内製薬

を光らす筈だ▼武藤奇智朗氏は大阪市東成區大今里町本町二丁目七三〇株式会社三共製作所へ移られた▼林野緑舟氏(吳)は遷光と改號された▼岸本悟志氏は(鳥取縣)は十二月七日午前十時、倉吉町魚町の自宅で永眠された行年四十三歳、謹悼。

川柳雜誌 第三卷 第一號

一册
金十圓

（逆料五拾錢）
金六五圓

一、今年概算 金二三〇圓

昭和廿三年一月廿五日印刷
昭和廿三年二月一日發行

大阪市住吉區万代西五丁目二五番地

麻生幸二郎

川卯維志士

振替口座大坂七五〇五〇